

平成27年10月1日発行 春燈/第70巻第10号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

October 2015

10月号



主宰の句

安立公彦



見たく来し浜木綿の海夕爾の忌

空蟬にのこる眼の透くばかり

前うしろなき大夏野草千里

いつ止むとなき蟬声や原爆忌

午後の時過ぐるひそけさ終戦忌

成瀬櫻桃子の句

明易やしてやりたかりしことばかり

『風色』昭和四十八年

「昭和四十四年八月十二日母逝く」と前書がある。

何のがざりけもない一人の息子の心からの叫びである。う。〈骨壺の前に裸でまた泣けり〉母に連れられて故郷を後にした師の歳月が凝縮され、全ての思いが籠められていて強く心を打つ句である。櫻桃子は、赤裸々に人生を詠んだ俳人であったと言えるのではないだろうか。

数多の抒情句の中に、人として真の姿を見た気がする。

久保久子

成瀬櫻桃子の句

〈欲望といふ名の電車〉 春騷雨

『成瀬櫻桃子俳句選集』平成二十二年

この戯曲は映画、演劇、バレエなど様々な形で表現されて来た。平成二十三年一月、舞台を大正時代の港町に置き換え、パリ日本文化会館において創作舞踊として公演し、大人袋が出る程の好演であった。

ブランチの心の葛藤を春騷雨と言う季語で表現され私には季語が大変興味深く、先生がおいでになったら芝居の話等を、一緒にさせていただけたのにと思ったり残念である。

豊谷青峰

燈下集



○ 鈴木直充

蟬せずし夕爾しのべばことさらに
水中花に背中をむけて着がへけり
ありなしの漣のながれや土用入
夜の秋簞笥はみだす何の紐
旅かばん底の葉や夏をはる

○ 高橋和女

薔薇ひとひら記憶の欠ら零れけり
哀しめば頷き返す水中花
夕昔や八つ連峰を指呼にして
蛸鳴く美しき山河や父母睡る
蛸のいのち惜しめとひた鳴けり

○ 柴崎甲武信

○ 菊地瑩子

秋の来る気配に耳をすまします
秋を待つ鳥が見張りをしてぬます
秋の雲湧いてきました少しづつ
秋の雲たしかに殖えてきてぬます
今はもうすっかり秋になりました

敦忌や香の天降りくる花棟
鮒鮓や大きな湖に小さき島
誰彼を待つにはあらず水を打つ
定量はベネチアの盃冷し酒
紙魚伏せ字チャタレー夫人の初版本

○ 近藤 牧男

ひと歩きしてゐて覗く金魚玉
雲の峰静かに息を溜めてをり
片側にばかり街の灯涼み舟
啄木の三倍生きて冷奴
酔ふほどに祇園祭の話など

○ 吉澤 恵美子

十葉の花の低きに雨つづく
紫陽花や番傘似合ふ寺男
大仏の機嫌うかがふ蟻の列
凌霄や武士の血色のこぼれ散る
何おもふ動かぬものに臺

○ ト部 黎子

自らは打てぬ終止符水中花
空蟬の爪にひめたる月日かな
風鈴の余韻のほしき未完の詩
こま切れの夢つながらず明易し

向日葵に笑顔ゆづりて旅立てり(悼・宮崎裕子様)

○ 卯木 堯子

向日葵や蒼空と雲鬘ぎ合ふ
百合姉妹背中合はせの香しや
蒙昧とは多数決とは草矢うつ
サザエさんのエスプリ愛す雲母虫
遠き虹永久に愛しき生き別れ

○ 深川 敏子

雲の峰仰ぐ戦災七十年
心太すする目の前日本海
八月や海見て酒と茹で卵
面影はピンクのブラウス酔芙蓉
アルバムに亡き人悼む秋の蟬

○ 和田 幸江

車窓より遠見の富士や梅雨晴間
潮入の水門錆びし大暑かな
卒塔婆の肩のさびしき青時雨
葉柳や老いて心根揺れ易し

亡夫の好みし蚊拵たたむ夢の中

当月集

安立 公彦選



○ 齋藤晴夫

たつぷりと空色の雨四葩咲く

佇めば散り急ぐなり沙羅の花

蓮開く極楽の風水面より

主水屋敷根付のほどの青蛙

荒れ梅雨に心の修羅を流しもし

○ 赤岡茂子

蒼天に諸手伸したる樟青葉（聖堂二句）

抜け出せぬ廟の鶯老いを鳴く

青ざしや同期のその後聞き洩らす

森林浴などしてよりの句涼し

庭先の暮色に紛る額あぢさゐ

○ 後藤眞由美

夏潮の一望千里とどろけり

昼は日の夜は月よりの竹落葉

子の影の背^ヲたくましや夏の果

冷酒酌む七歩の才に遠くおて

向日葵の笑顔天にて咲きにけり（悼・裕子様）

○ 吉村さよ子

夏葱抜き急ぐ厨に人の声

老犬の寝る小屋見ゆる夏座敷

飛乗りて独り汗ふく旅はじめ

高圧線空に弛める大暑かな

庭草に落ちてか細き蟬の声

○ 石原節子

冷奴男のおろす新生姜

簾かけきのふも遠くなりしかな

青嵐留守番電話鳴つてゐる

郷愁や打上花火果てし空

大夕焼消えて残るや旅ごころ

春燈の句

安立 公彦選

所在なき吾に寄り来よ糸とんぼ

神奈川 溝越 教子

黒揚羽藪より出でて藪に消ゆ

御手洗の水吐く竜や秋暑し
寄書の当時を偲ぶ敗戦忌

神奈川 丸山 允男

蟬しぐれ木道にひび走りけり

手花火の光を囲む小さな掌

空蟬の割れたる背ナや旅終はる

かなかなや訪うて故郷の山青し

東京 池田 節

兵庫 秋山 蔦

峰雲の向かうは故郷覇氣貫ふ

大夕焼雲と海との出会ひかな

蓮咲いて浄土の苑となりにけり

夕焼を引き寄せてゐる砂丘かな

縁日の地藏通りの日傘かな

夕萱の色に風ふく仙石原

千葉 廣瀬 克子

夕萱や村にぼつぼつ灯りつく
梅雨晴るる池に鮮やか鳳凰堂(平等院二句) 滋賀 馬場 節子

昼寝覚大事なきかとニュース聞く

天蓋は如来の祈り梅雨探む

うみどりのみなましろなる原爆忌

梅雨の湖茫洋として沖はるか

夏潮の七十年の叫びかな

此所かしこ異国語を聞く柿雨城下

東京 小林 文良

神奈川 官崎 紗伎

朝曇ひと日始まるパンちぎる

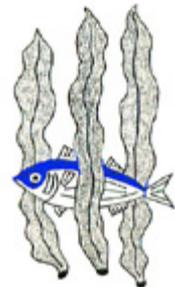
蒼空のくらすや沖に船灼けて

文鳥に盛夏の黒子ついまれ

ビルの影ビルに映して盛夏かな

片陰を濃うして続く武家屋致
護摩壇の不動まばゆき大暑かな

水換ふる金魚や古りし遺影の父
遠縁の忌日に集ふ夜の蟬



余言

安立公彦

路刈つてコロポックルのくに狭む

片桐てい女

わが国の創生にまで遡る壮大な作品「コロポックル」はアイヌの伝説で、アイヌ以前に北海道に住んでいたとす倭人。人類学者坪井正五郎は、これを日本列島の先住民で、アイヌに追われたと主唱、またコロポックルは、アイヌ語で、路の下に住む人の意とも記されている。

ここに来て「路刈つて」がクローズアップされて来る。この「路」は「秋田路」である。葉柄の長さニメートル。小人でもなくとも充分身を寄せられる。この句は、そういう壮大な夢をひと時読み手に与えてくれる愉しさを持っている。卒寿を過ぎた作者の「うた心」の若々しさは美事だ。

ふるさとの海抱きとむる日焼の子

鷹崎由未子

今年の夏は暑かった。これは毎年の繰り言ではなない。氣象の数値が示す事実である。作者は今、日焼けした海辺の

子供達を見ながら、この「ふるさとの海」を守るのは、目の浜辺で喜々として水と戯れている子供たちの成人した姿であるという思いを深くするのである。

「海抱きとむる」には、四方に海を巡らすこの国の、海への深い思いが感じられる。今、海を守ると書いたが、抱きとむるには、「守る」という一方的な意味と異なる、言わば、相思の思いが籠められている。素晴らしい表現だ。

石仏を濡らす淋雨や苔の花

松木 峰春

「淋雨」は「森雨」、降りつつく長雨。この句を見ていると、何故か堀辰雄の「浄瑠璃寺の春」を思い出す。季節は異なるが、また浄瑠璃寺の風景とも異なるが、この句には、何か知らぬ文学性を感じる。

路傍の石仏を濡らす梅雨の長雨、傍らの苔は白い胞子体を花かとはかりに見せる。こういう景は良く目にするが、通り過ぎることが多い。写主の効いた句だ。作者は体調を崩されていたが快癒との事。安堵の思いである。

蟬すずし夕爾しのべばことさらに

鈴才 直充

八月号は「木下夕爾没後五十年特集」号だった。久方ぶりの特集号である。巻頭の夕爾の写真は見る人にそれぞれ

の思いを与えたことだろう。胸ポケットの万年筆が、絶妙のアクセントとなつている。夕爾のご息女宮崎晶子さんの文章は良かった。夕爾の知らない一面が確かな筆致で書かれている。西椿始さんの「句碑巡礼」も読み応えがあった。そして春燈一門の皆さの文章も愉しく読めた。

特集号の掉尾は鈴木直充さんの「春燈と木下夕爾」。二十八頁の長文である。木下夕爾という、春燈の中でも抽んでは俳人の全容が、余すところなく記されている。この文章には、余ほどの時間が必要だった。そういう時を経て、今校正刷を見つつ夕爾先生を偲ぶ思いが、「蟬すずし」によく表現されている。みごとに文章である。

梅雨の月最後の句帳閉ちにけり 三宅 文子

春燈同人宮崎裕子さんの逝去は七月十二日だった。九月号の余言に載いた。その十月号に故人からの出句があった。「三宅文字代筆」とメモしてある。三宅さんが宮崎さんの句を選んで出句したもの。へさりげなく死後の話や合歡の花 裕子」の句がことに切ない。

十月号の中で、裕子さんへの悼句は、燈下集だけで十数句あった。掲出句、「最後の句帳閉ちにけり」に、故人となつた朋友への別離が悲しみを越えて表現されている。

風鈴や心つながる夜の星

佐々木良玄

この句の前に、〈虚空より妻のささやき夏座敷〉という句がある。七月号に、〈逝く妻の枕直して春惜しむ〉の句があるので、夫人の逝去は五月か。夫であれ妻であれ、伴侶との永訣ほどま悲しいものはなからう。

この句、折からの星空を仰ぎ、夫人を偲ぶ作者。をの星には妻が居るといふ思いが素直に作者をつつむ。折しも座敷に吊した風鈴がりんと鳴る。今作者のころは、天空の星に住む夫人としっかり結ばれているのである。哀しみが立派な文芸として甦っている句だ。

霊を呼ぶ哨唎の調べ施餓鬼壇 廖 運藩

「哨唎」は樂器の一つ。チャルメラの類。「施餓鬼」は歳時記では、孟蘭盆会に寺で無縁仏の霊を弔うこと、とある。元もとは飢餓に苦しむ鬼や亡者の霊に、飲食を施す法会の意だったが、孟蘭盆会と混同したという。

「霊を呼ぶ哨唎の調べ」が如何にももの悲しく、そのもの悲しさは仏事の風習を濃く纏っている。

春燈俳句台北句会から、毎月カララの句会報を戴いている。七月号の題は「鬼月」。鬼月とは、陰曆七月、黄泉の国から鬼たちが現世に戻る風習、とある。施餓鬼と等類か。孟蘭盆会も、迎火、送り火も、都市部では間遠くなった。次世代に引き継ぎたい大切な行事の一つである。